

カトリック仙台司教区・ **カリタスジャパン** 東日本大震災救援・復興活動ニュースレター

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

新年度には、いろいろな変化があります。カリタスのベースとして、多くのボランティアさんから親しまれていたベース長さんの異動もありました。大槌ベース、大船渡ベース、もみの木のベース長さんが変わりました。その他、福島デスクの移管、カリタス釜石の4年目の抱負、ハルノコー神父とのお別れ、ボランティア登録者1万人目の方からの記事もご紹介しています。

カリタス大槌ベース・カリタス大船渡ベース ベース長交代

《カリタス大槌ベース ベース長 片岡英和》

2014年4月より大槌ベースのベース長に就任しました。初代古木眞理一神父様、川口茂助祭に次いで3代目となります。

私自身は、2011年8月に古木神父様とともに大槌入りして、こちらに来て3年目となりました。初年度の頃と違って現在のベースは大槌町民にとっても受け入れられています。まずは今まで各ベース長が作り上げてくださった大槌ベースというものを壊さないように頑張りたいと思います。

これからの大槌ベースの目標としましては、何をおいても被災者の方々のことをまず第一に考えるということ。このことに関しましてはベースの立ち上げ以降、ずっと行われてきたことです。スタッフ・ボランティアがメインという考えではなく被災住民の方々の、あくまでお手伝いさせていただく立場だということをしっかり受け止めたいと思います。

最近よく、ベース事務所に子どもたちが遊びに来てくれます。スタッフが対応できる時は一緒に遊んでいるのですが、そのたびに子どもたちの遊び場があればとよく思います。被災以来、小さな子どもたちの遊べるような場所・公園などはありません。町役場の方ともいろいろと話してみましたが、防災関係や復興住宅などの建築がどうしても先になり、そこまでは手が回らないそうです。クリスマス会なども開催してきましたが、これから先もっと子どもたちに対する支援をやらなければいけないと感じています。

3年目に入り、各被災地でボランティアが減少しているということはよく耳にします。大槌でも例外ではありません。全国的に見れば復興ボランティアというのは、もう終わったという雰囲気が流れているのかもしれませんが、しかし現実にはまだまだなんだ、ということをもっと広い範囲の人々が感じてくれるようになってくれることを期待します。



《カリタス大船渡ベース ベース長 エドガル・ガクタン神父》

2014年1月20日から大船渡ベース長として赴任したエドガル・ガクタン神父です。私は震災後、同じ淳心会会員のハルノコー神父（インドネシア出身）とギャリー神父（私と同じフィリピン出身）と現地派遣の下準備として東北のいくつかの被災地を視察しました。

両神父の現地派遣の理由は、被災を受けた外国人たちのケアでしたが、2人は現地のニーズに応じて、いろいろな形で教会と社会に奉仕してきました。

ハルノコー神父はこの間仙台教区外へ異動しましたが、彼は2期も大船渡ベース長を務めました。ギャリー神父は今もなお、仙台教区において外国出身の信者たちの司牧に励んでいます。私は、今年の4月1日から仙台教区第4地区の司牧にもあたるように任命を受けました。

司牧のチャレンジがいろいろあると思いますが、ベースにおいて、今まで通り私たちスタッフが一致し、それぞれの分野を生かしながら大船渡ベースに来てくださるボランティアたちが忠実に活動出来るように環境をいつも整えて行きたいと思っています。



当ニュースレターの第48号にて、大船渡ベース事務局長が2014年の活動は大きく3つの活動になっていくと紹介してくれました。

1. 自宅再建された方・在宅被災者への見守り活動、2. 仮設住宅での生活を余儀なくされている方々への訪問活動、3. 個別依頼への対応の3つ。大船渡ベースが関わっている活動の中で、まさにその3つの活動がメインと言っても過言ではありません。

こういった活動と目の前にあるニーズに応える活動を続けながら、現地の未来作りを応援するプロジェクトをも私たちスタッフ一同で考えています。そのプロジェクトはまだ検討中です。私たちスタッフ一人ひとりが聞いたり、見たり、感じたりした現地の情報を、毎月、互いに話し合っ、いろいろなアイデアを練っています。いつか当ベースにてこのプロジェクトをご紹介したいと思います。

福島デスク移管

仙台教区サポートセンター 福島デスク Sr.野上 幸恵

震災・原発（核）事故から3年過ぎ、東日本大震災／大津波／原発（核）事故の被害が複雑に絡み合う「福島」で「福島の問題」に取り組む仙台教区の「福島デスク」は、事務所を二本松教会から福島市野田町に移転しました。これまで、福島デスクの活動を立ち上げ培って来てくださった「NPO 福島やさしい畑」の柳沼千賀子さんに感謝し、教えていただきながら、今後も「福島デスク」を皆様とともに育てなければと思っています。

マリアさまの月、連休明けの5月7日（火）に、それぞれの地から、私たち3人が「福島デスク」に引っ越し荷物と一緒に到着しました。聖母訪問会のシスター藤原、マリアの宣教者フランシスコ会のシスター佐久間、そして聖心侍女会のシスター野上。別々の修道会から派遣された3人は姉妹たちに支えられて、この地での使命をともに果たしていく決心を新たにしています。



それぞれに福島の現状を知るために、5月の引っ越しまで活動しておられる小教区でお話を伺ったり、各地でのボランティア活動に参加したりしながら準備を進めてきました。

デスクとしての仕事は、福島に関わっておられる活動体をむすぶこと、国内外に向けて福島の現状を知らせること、そして、福島ブロック会議の運営があります。

「3年もたったから、もう、大丈夫でしょう！」と、忘れ去られていきそうな福島の現状を、人々の生の声を声の届かないところに届けるために、活動しておられるところに出向いて、人々や自然の現実に触れていくことに努めています。

しかし、住み始めてみて頭でわかっていたことと現実の乖離に、理解していることが肚におちて納得することとの相違に改めて愕然としました。町内会の班長さんに、「ここもしばらくしたら除染がはいります」といわれ、《えっ、除染?!》と一瞬、狐につままれたようでした。広い庭にはいろいろなものが植えられたり自生したりしています。普通に見えます。どこも変わったことのない本当に普通の庭です。福島での現実に直面した第一日でした。

教会でのミサ、そして住まいでの聖体礼拝をともにして一日を始める私たちの生活は、祈りと福音に基づいて、神からの息吹に導かれるように感じています。その中で出会う人々、生きとし生けるものの「いのち」の輝きをともに取り戻していくことを願っています。「いのち・光」そのものであるキリストに希望を置いて歩み続けることが出来ますように皆様の支えとお祈りをお願いいたします。



「三年目から四年目へ」

特定非営利活動法人 カリタス釜石 伊瀬 聖子

この一年、時間の流れは速かったのか遅かったのか？ 全く思い出すことが出来ません。気が付いてみると「三年の節目」を迎えています。被災地を直接目視できない地域で生きている方にとって、「3・11 忘れない」とか「風化」という言葉は大きな意味を持つのだと思います。周りを巻き込みながら、また、自らを鼓舞するかのごとく繰り返しこの言葉を語ることによって、被災地に心を寄せ、被災された方々を支えようとする想いが伝わってきます。本当に頭の下がる場面に何度も直面しました。

このように全国的な、いや世界的な支援に支えられてこの三年は過ぎていきました。

しかし不思議なことに何故かここ、まさに被災現場にいとそういう言葉が取りざたされること自体に若干の違和感を覚えたりもします。何故なら被災地に生きる人たちは、あの日の出来事を忘れることはないし、今もなおその後の生を生活しているからです。

これまでの三年間、特にこの三年目の年は、みんなの「頑張るぞ！」という強い志と「もう頑張ることに疲れた」という本音が複雑に入り交ざった交差点のような一年だったように感じています。

これまで我慢してきた色々なことに耐えきれなくなり大粒の涙を流される方がいます。この悲惨な出来事が自分自身の歴史の上に起こった現実であることを徐々に受け入れるプロセスを歩んでおられる方が多く見受けられます。

ここで支援活動が続ける私自身も、彼らと同じく頑張る生きてきた人びとの一人である事実を噛みしめる瞬間がしばしばあります。一体いつまで頑張ればいいのか？

いつになったら普通の日々に戻れるのか？ いつかは被災者も被災していない人も「釜石の人」として同列に並ぶ日は来るのだろうか？ 色々な想いや感情が湧いてきた一年でした。

四年目はどんな一年になるのか想像もつきません。復興公営団地への移転が加速し、自力再建する人も増えるでしょう。新しい建物や商店などが整備される一方で街の復興に置いて行かれる人、深い悲しみから立ち上がれない人も必ずいると思います。カリタス釜石は後者、つまり復興の速度について行けない人をいつも意識しながら共に歩んでいきたいと思えます。釜石の人びとが元気になるよう、人生を喜んで歩めるように小さな奉仕の道を歩き続けたいと願っています。



サロンに参加していた住民さんがご自身の手芸作品について、「この顔は今の私の気持ちなのよ」と教えてくれた



仮設住宅・みなし仮設住宅でのサロン



鶴住居地区防災センターの取り壊しの様子

仙台教区滞日外国人支援センター

ハルノコー神父様のさよならパーティー

菅原マリフェ (パガサ)

私たちがハルノコー神父様のお別れ会をしたのは3月29日のことでした。私たちは10時半からロザリオの祈りをはじめ、ハルノコー神父様はその祈りに加わりました。11時から、この月のタガログ語ミサをしました。それは私たち一人一人の心に残る忘れることのできないミサでした。皆が神父様の話に聞き入っていました…

私たちにとってハルノコー神父様による最後のタガログ語のミサで、それはとても意味深いものでした。なぜなら、お説教の中で神父様は私たち共同体メンバーのために大事なメッセージを残したからです。

私たちが泣き始めた時、まだミサは終わっていませんでしたが、ハルノコー神父様も涙をこらえきれず、彼もまた皆と泣いていました。本当に一生忘れることのできないミサとなりました。



ミサ後、私マリフェ (陸前高田リーダー) とエルバ (大船渡リーダー) は共同体メンバーに短い説明をし、神父様のために作った映像を皆と見ました。2年半の間に集められた写真にその時その時の思いやメッセージを添えて…

その思い出や神父様の東北での歩みを見た後、メンバーのみんなで準備をした食事をいただき、終わったのは午後2時半ごろでした。

さよならパーティーには、パガサ岩手から30人、バヤニハン気仙沼から4人、そして10人ほどの子どもたちが参加しました。もちろん、大船渡教会のイベントがある時には必ず訪れてくれる上智大学の寺田先生も！

私たちは本当に素晴らしい時間を神父様と過ごしました。最後の最後に至るまで神父様はできる限り私たちのことを考え助けてくれました。ハルノコー神父様と共にいたこの2年半はとても言葉には言い尽くせないほど心に残るものでした。私たちのもとから去ろうとしている今、私たちは悲しく、神父様がいなくてとても寂しく感じるでしょう。

なぜなら、ここ大船渡にハルノコー神父様がたくさんの思い出を残してくれたから…。



震災当時、留学生の友達は次々と国に帰り、日本を離れていきました。「日本は危ない、日本を離れなよ」などと色々言われましたが、実際に自分の目で見ないと何も言えないと思ったのがきっかけで、ボランティアをすることになりました。

遡ること、2年ちょっと前に初めて被災地ボランティアへ大学の友人3人と参加し、米川ベースに通い始めました。当時は、震災から1年経つ直前でボランティアの数も当然今より多く、町はところどころに瓦礫が山積みになっており、津波によって被害を受けたスーパーや病院などもまだあり、殺伐としている印象がありました。

その中でも、南三陸町にあった「サンポート」というスーパーの瓦礫撤去をやったのが1番忘れられないです。スーパーなので、埋まっている・落ちていた瓦礫で何の売り場か分かり、震災後、手つかずのフロアをカリタスで任されることがありました。1年近く経っていましたが、当時のまま海水が残り、ゲームセンターの大きなゲーム機も倒れ、どこかの子どものおつかい用のお財布など、大小さまざまな瓦礫で溢れかえっていました。その時は、ここにいるメンバーで瓦礫を仕分けてキレイにすることに手一杯で、あっという間に時間が過ぎましたが、今思い返しても凄まじい光景だったと感じます。あの時のままの光景1年近く経っても残っており、その1か月半後に来たときにはサンポートの作業は全て終わり、解体の準備が始まっていました。



活動は体力的にも精神的にも初めてだったためか、大変に感じる時もありましたが、米川ベースで過ごす時間が楽しくて仕方なく、様々な年代の人とも良い意味で壁を感じずに交流できるのも新鮮でした。合宿のような雰囲気、米川ベースは多くの人と再会し、また新しい人と出会う場所となっています。活動で知り合う漁師さんや仮設で出会った子どもたちも覚えていてくれると、来てよかったと心から思えますし、ベースの常駐スタッフさんからも行くたびに「おかえり」と言ってもらい、また来たくなくなってしまうのだと思います。

東北に行ったことがないなら、1度は自分の目で見たいと思います。実際に足を運んでみると、報道されない課題があることもわかりますし、東北が身近になることが復興に繋がると私は思っています。活動中も自分は微力すぎると思うことも多々ありますが、今は米川ベースと南三陸町の人に会いたくて行っているほうが大きいです。社会人1年目で、学生の頃のように長期では行けなくなってしまいましたが、今後も東北には足を運んでいきたいと思っています。



登録1万人目のボランティアになって

カリタス米川ベースボランティア 村松 千歌

この度、サポートセンター開始以来、登録1万人目のボランティアということで寄稿させていただくことになりました、村松と申します。

これまで米川ベースに2012年3月から10回活動に参加させていただき、つい先日のGWで1万人目のボランティアの知らせを受け、ただただ驚いています。(ベース長が驚かそうと発表したため、怒られるのかと思いました笑)。